

記 録

文書館における学問と社会的役割

― 広島大学文書館設立記念シンポジウムの記録 ―

開会あいさつ

広島大学長 牟田 泰三

本日は、文書館に森戸辰男記念文庫を開くことができました。それを記念して、シンポジウムを開催することになりましたので、ひとこと、ごあいさつを申しあげたいと思います。

広島大学で、この四月に文書館をオープンしたのですが、考えてみれば遅きに失したかなという気もします。広島大学にあるいろいろな古い文書（ぶんしょ）、新しい文書といったものを、図書館とはまた別の観点から蓄えて、それを整理して置いておこうということで、文書館を設置したわけです。この文書館のなかで、最初に手をつけるべきものは何かと考えたときに、誰が考えても、初代学長である森戸先生の文書を、ここで集めておくことが大事であろうということになりました。初代学長の森戸先生は、几帳面という言葉が適切かどうかはわかりませんが、資料を非常に丹念に残しておられます。私などは、今日あった資料が明日にはなくなっているような状態なので、大変見習

わなければならぬと思っっているのですけれども、森戸先生は非常にきちんと残しておられましたので、大変な量の資料が残っております。

森戸先生がかかわられた、いろいろな行政的な事項に関連する文書、もちろんご自身で書かれた原稿等も含めておられますが、そういったものが、ほとんどすべて残っております。ところが、この文書の大部分を、広島大学がご家族のみなさんから譲り受けて管理してきたのですが、一部は別の場所にありましたので、ご家族のみなさんのご協力を得ながら、これを一同にまとめるということで努力をしてきたしだいでございます。これについては、文書館の小池館長をはじめ、みなさんの大変なご努力がありました。まだ完全に片がついたわけではございませんが、最終的には、これらの史料をすべて広島大学の文書館に持つてきて、一括管理するというところで、話がほぼまとまっております。このたび、森戸辰男記念文庫開所式をやるとういうことで、先ほど、看板掲げ式をやってきたところでございます。この看板は、森戸先生の奥さま直筆の看板でございまして、非常に達筆でございまして、大変お恥ずかしいことに、その右側に、私が文書館の看板を書い

ていまして、すごく見劣りがして困ったなと思つているところでございます。

そのようなわけで、文書館に森戸辰男記念文庫ができあがりしました。いま、それを分析して整理中でございますが、この整理がきちんと済んだ暁には、みなさんが全部を閲覧することができるようになると思つています。現在でも館長と相談すれば、きつと全部見せてもらえると思つています。森戸先生にかかわるいろいろなできごとについて調べたいと思われる方は、世界中からここに来るしかないということになり、広島大学の大きな財産の一つになっております。これは最初の仕事で、次々といろいろな文書が蓄えられていくものと思つております。また、広島大学の事務的な公文書に関しても、ここで整理する予定になっております。

本日は、文書館の設立および森戸辰男記念文庫の完成を記念いたしましてシンポジウムを開くことになりました。どうぞ、みなさん、ご静聴いただきますようお願いいたします。本日はどうもありがとうございます。

(むた たいぞう・広島大学長)

## あいさつ

木田 宏

このような森戸先生の記念文庫が広島大学にできまして、本当に素

晴らしいことだと思つております。私と森戸先生との関係等について、若干、思い出を話させていただきまして、ご参考にしていただければと思つています。

ただいま、ご紹介がございましたように、私は長いあいだ文部省に勤めておりまして、特に大学をお世話させていただくことになったものですから、森戸先生とのご縁もいろいろな意味で深くなつてまいりました。

私が森戸先生に一番教えていただきましたことは、大学というものが、大学として、どう考えなければならぬかということでございます。森戸先生は、一三年間、広島大学の学長をなさつておられましたときに、世界の大学長の集まりである国際大学協会のアジアの理事もなさつておられました。ちょうど昭和四〇年ですか、私が文部省でユネスコ関係の仕事を担当しておりましたときに、「君、今度、僕が国際大学協会の総会を東京で開くことにしたから、二年間かかつて、その準備を担当してくれんか」というお話がございました。私は文部省で仕事を持つておりましたけれども、ほとんど一年間は、森戸先生の国際大学協会という、五年に一回ずつ世界大会をやつて四百校ぐらゐがお集まりになる国際会議の受け入れ役を処理させていただきました。言葉ができるわけでもないし、それまでは日教組（日本教職員組合）対策課長などというあだ名をもらひまして、国内の仕事ばかりをやつていたので、世界の大学がどうなつてゐるかというふうなことに ついて何にも知らなかつたのでございます。しかし森戸先生のご指示によつて、そのような仕事をさせていただいたために、大学というも